

北海道農家の金詰り

逸 見 謙 三

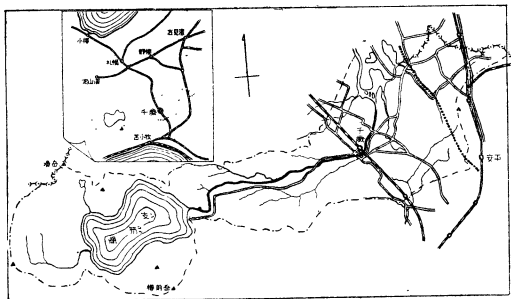
二〇二

日本では全人口の約半数の人々は農家の人なのであるから、農業に従事している人達の生活は、他の凡ゆる職業に従事している人達の生活よりも一般的でなければならぬと考えられ、最も熟知されて居り、或いは日本人の生活のモードを示していると考えられる。しかしながら現實は異つており、それが非常に多様であるため、なるほど或る農民に關する事象は或る一部の人間には一言する必要もないような明白な事實ではあつても他の大部分の人々には全く珍しいものである場合が多いし、夢想だにしていないかつたことである場合もすくなくない。だから知っている人がある場合でも繰返して述べた方がよい場合も多い。本稿に述べる北海道石狩支廳管内千歳町の農家の近況（二四・一二・四——一三日の間の四日間に行つた過去一ケ年に關する調査）もまた、上述したような農家の日常に屬する。千歳町には著名な國立公園支笏湖、鮭の養殖場、また立派な飛行場があるのを知っている人は多いが、この町の農民の生活を知っている人は少ない。また隣村安平村の農家を訪ねて北海道の酪農を云々する人はあつても、このよ

うな町の酪農家を訪ねる人は少い。だが千歳町の農民は自分達の生活を當然過ぎる程當然なものと考えている。かつて苦しんだ時よりも今は樂だとすら考えている。それは悲慘と云う程のものではない。また北海道農民の最低を表わすものでもない。しかし社會の問題として採り上げる價值が充分にある生活のように感ぜられる。

二

千歳町は札幌から苫小牧に通ずる鐵道の沿線にあつて、札幌に四〇軒（汽車で一時間餘）、苫小牧から二八軒という位置にある。現在では苫小牧から札幌に通勤や通學する人もある程だから全くの近郊農村であると云える。地勢上古くから札幌——苫小牧間の交通の要點であつたし、戰爭中海軍航空隊があつたりして都會化されている。驛は最近焼失したが現在にはスマートに再建され、町役場は立派でその面している國道の兩側には大きな商店・金融機關等が並んでいる。町全體の面積は三九方里、五萬町歩もある。全人口は一萬六千足らずであるが戦後の膨脹が大きい（昭和一二年一萬二千餘）。町の全貌は次頁の地圖が示しているが



千 歳 市 略 図

第 1 表 農業生産高の推移 (躍進千歳の姿64頁より)

年次	米				麥				大豆			
	作付 反別	反収	収量	出廻 數量	作付 反別	反収	収量	出廻 數量	作付 反別	反収	収量	出廻 數量
大11	440	石 1.35	5,940	石 一	654	0.87	5,750	石 一	234	0.96	2,250	石 一
昭 2	563	1.60	9,008	一	230	0.69	1,600	一	270	0.69	1,617	一
8	836	1.20	10,032	5,604	476	0.72	3,425	2,670	615	0.68	3,740	3,092
12	864	1.05	9,072	4,658	646	1.05	6,823	5,644	639	0.47	3,010	1,352
17	823	1.14	9,382	3,928	683	0.60	4,141	2,836	564	0.43	2,425	1,217
21	583	1.24	7,223	2,416	367	0.45	1,652	422	219	0.48	1,051	595
23	609	1.24	7,602	2,725	335	0.36	1,222	426	225	0.35	774	638

多くの山地と未耕面積を含み、耕地のあるのは国道附近より東北部に限られている。農畜産に利用されているのは全面積の一割に満たない。農家の数は昭和一〇年では町の半ば以上、二三年では三分の一以下である。もつとも後者については統計に現われた他の職業戸数が過大な様にも感ぜられる。たとえば商工業者戸数は町勢一覽によれば六三〇戸だが、二四年一〇月町役場で發行した『躍進千歳の姿』によれば二七八戸に過ぎぬ。しかし農業の比重の減じて來ているのは否めない。その他の町勢については夫々附表の示すに委ねる。しかし反當收穫高が極めて低いこと、そして年々低下しつつあることは注意する必要がある(第1表)。

數年に及ぶ肥料不足にもましてこの事實を結果せしめたのは

家畜頭数の不足である（そして地力の低下と乳牛の減少は悪循環をなす）。家畜は飼糧の不足と主食作物の増産の犠牲となつてゐるが、最近では農家の金詰りから手放されることが多い。たとえば中央部落では約一〇〇頭の牛が四〇頭になつてしまつたが、多くは金詰りからであるという。元來この町の反當收量が低いと云ふことの原因は附近の自然條件に基いてゐるのであつて、次の引用がよく示してゐる。

「本町の土壌は樽前山系火山灰にして粗粒火山灰（岩燐灰）なり。土壌中の肥料成分含有量は頗る稀薄、且流亡率大である事は言を俟たない。加うるに當地域は石狩平野と勇拂原野の切際であつて、太平洋の濃海霧及び冷風冷氣が作物の生育開花結實の適期五月から一〇月迄絶えず南風に乘じて來襲、例年約五〇%より三〇%の減收を恒久且慣習的に生じて居る實態である。」（『羅邁千歳の姿』六四頁）

この町では相當量の堆厩肥を年々投下しなければ反當收獲高は上昇しない。市街から眞北に當る長都は北較的古い五〇年ぐらい前の開拓部落であり、乳牛が多く入つてゐたため一時は反當收獲高は相當高かつたと云われている。しかし現在は牛の飼育頭数の減少の結果低下してゐる（統計面では半分以下になつた）。それでも新しい部落例えば安平との中間にある阿宇佐里——二、三〇年前開拓——に比すれば遙かに高いらしい。一戸當り經營面積の減少も顯著であるがこれは二〇〇戸餘りの入植者の小經營が加わつた結果でもあつて事實は餘り變つてゐないという、がしかしその

程度はわからない。開拓者は彼等だけの協同組合を作つてゐる。ついだから述べるが残り六〇〇餘戸の農家について協同組合が二つある。一つはその事務所を千歳町市街に置くもので地圖に記載してある路線より西南部（通稱本部）の農家がこれに屬してゐて、組合員数は六〇〇戸である（町の家庭菜園を有つてゐる者二〇〇戸を含む）。今回の調査農家は全てこれに屬する。他は路線より東北部（通稱東部）にある二〇〇戸餘りの農家よりなりその事務所を町外の三川に置いてゐる。東部は多く丘陵で、本部の方も主として學校を中心とする附近に少數の家屋と耕地がある以外は、多く未だ山林と原野である。水田のある處は農家が多い。そして部落から部落に至るのに、二里と云う人煙稀な林道の距離はこの町の文教上、行政上、經濟活動上の大きな障害となつてゐる。たとえば農業協同組合の總會には市街の北方三里半の劍淵まで自動車を出さねばならず、市街の眞東二里半の阿宇佐里の中学校は數名の生徒しかない。日用必需品の購入が全て男手によつてなされてゐる農家が多い。畑生産物から自家食糧と飼料を差引くと販賣し得る量は僅になつてしまふ。多くの畑作農家の現金收入は一、二頭の牛の牛乳代に頼つてゐるが、牛の乳量は少い。牛乳代より比重は少ないが農閑期の出稼勞賃も農家經濟には重要である。牛乳代が上層農家になるほど、そして出稼勞賃が下層農家となるほどその比重を増大せしめてゐるのは當然である。水稻作を主としてゐる部落では米の販賣と出稼勞賃が大きな意味を有してゐる。米の闇賣は一俵五千圓なので米作農家の經濟を大いに

潤している。ここでは酪農家は殆んど見常らない。水田地帯の反収の低さは、地味が悪いと云うことの他に水利に多く影響されている。谷川の冷水が稻の生育を阻害している。しかし遊水施設は零細経営であるために出来ないと農家では云つてゐる。

以上は故意にミゼラブルな書き方をしたのである。今後述べる一戸一戸の農家の内容は以上述べたことが農家の生活にどのようになつてゐるかを示している。農業協同組合の建物や町役場のそれに比して遙かに小さく暗い感じを與える。そして出納係が、續々と現金引出しや或いは借金に來る農家の人々に對して、千圓といつた小口すら出し澁つてゐる様子は、其處を訪れた者に意外の感じを與える。この農村にだけ收穫の秋が訪れなかつたのではないかと。

調査農家は十戸ばかりであり、本稿は北海道全道十ヶ町村百戸について行つた同様の調査の一部である。

三

先ず農家の經濟を聴取りの結果について分析する。

この町の農家の經濟はいうまでもなく零細であつて、數字面では平均して一町餘の水田と、二町半の畑と、一頭の馬及び半頭の牛から一經營が成立つてゐる。これを右符支應農家の一戸當り經營面積五・四町(内水田二四%)、馬一・四頭、牛〇・五頭に比すれば、管内におけるこの町の農業經營の地位を云々し得る。現實には附表三と附表六との比較で水田四〇〇餘町歩、畑八〇〇餘町歩の差があり、これが不作付地となつてゐる。したがつて農家の

第 2 表 農業經營零細化の推移

				單位	大正 11	昭和 8	昭和 13	昭和 18	現在
農業	戸數	戸	戸	戸	554	658	732	611	836
内水田	作農	戸	戸	戸	-	442	429	430	583
水田	反別	町	町	町	440	826	848	797	620
一戸平均	反別	町	町	町	-	1.9	2.0	1.8	1.06
畑	反別	町	町	町	2,569	2,091	3,356	3,258	2,400
一戸平均	反別	町	町	町	4.4	3.6	4.5	5.3	2.8
馬飼養	頭數	頭	頭	頭	486	783	959	1,056	1,140
農家一	戸平均	頭	頭	頭	0.8	1.3	1.3	1.7	1.3
牛飼養	頭數	頭	頭	頭	70	587	913	846	314
農家一	戸平均	頭	頭	頭	0.1	1.0	1.2	1.4	0.3

備考 「羅進千歳の姿」63頁より

この廣い不作の荒地とか原野に近い所謂限界地であることを物語つてゐる。第2表は現狀が往時に比し經營規模が半減した結果なることを示している。さて調査農家は全體この平均を現わすように選定した。しか

しその平均は附表1に見られる通り水田九反、畑二・七町、牛一・八頭、馬一・四頭で、何れも平均より高くなつてしまつた。しかし石狩支廳の平均より低い。牛の頭数が多いのは單に土地が瘠せていると云う證據である。調査農家の平均が町の平均より高くなつてしまつたのは水田農家及び面積を約半分、酪農家を半分含ませて、しかも開拓間もない部落、舊い部落、町の市街に近い部落等に各農家が散在するように、また經營面積の大中小に各農家が町全體の農家と同じ頻度で分布するように調査農家を選定したためである。平均において既に喰違ひのあるように、結果は必ずしもそうなつていない。そうなるためには十戸と云う數は餘りにも少なかつた。

調査の結果は全てを要約して附表1に示した。

調査の期間はそれ程嚴密なものではない。二三年の收穫から二四年の收穫の前迄と云う程の意味である。突然の聽取ではこれ以上は無理のように思われる。また大體百圓單位で答えられた場合と錢單位まで詳しく答えられた場合とがある。結果では全く明らかなと思われる誤謬は訂正して置いた。この修正は平均の分析では無視し得る程のものである。次に調査は全く現金面の配給を受ける農家の家計支出は大となり、また現物が賣れない場合（ヒックスの云う reservation demand が強い場合）の財産増は不明である（農家1の場合横に關してこれは大きい）。現物給與の出稼（農家10は米を支給されて出稼している）も現

われていない。生産單位は働いている男子を一〇〇、女子を一〇〇として計算した。従つて農事に限られない。消費單位は

一七歳	〇・四	六一—七〇歳	男〇〇・九 女〇〇・七
八一—四歳	〇・八	七一歳以上	男〇〇・八 女〇〇・六
一五—六〇歳	男一〇・〇 女〇〇・九		

として計算した。いずれも一般の慣習に従つたものである。「働いていない」ということは主觀的判断による。農家9および10はもつと大であり、農家2はもつと小さいかも知れない。所得的及び財産的收支は共に一般の定義によつた。即ち資産の増減を來すや否やが分類の基準である。但し利子及び小作料は經營費なるにも拘らず別の項目に入つてゐる。小作料は農家3、6及び8に於いて計七千圓であり、利子は農家2及び8に於いて計二五一圓二二錢である。他にない。

さて最近同じ形式で行われた調査、農林中金「水田二毛作地帯の農家經濟」（昭和二十四年九月——以下Xと略稱す）と比較して見よう。Xの調査期間は私の場合（以下Yと稱す）より半年早い。又家族の分け方が異つているため大體の規準で修正した。そして附表1の平均、農家1及び2と貨幣經濟の規模が類似しているa'、1'及び10'をXから選んで附表2を作つた。XとYとの比較の結果を簡條書にして示そう。

(1) Yに於ける現金經濟の規模の最大・最小はXに於ける夫々と大體匹敵しているが、平均はXの方が高い（中金前掲書による）。生産手段による經營の規模はYはXの十數分の一である。

(2) 消費單位當り家計支出はXの場合の方が大である。實際にはYの場合は主食費が含まれていて、都市生産による商品の相對的価格はYの方が高いのであるから、生活の實質は數字面に於けるXとYの差をさらに大ならしめている。

(3) 生産單位當り所得的收入はYの方が大であるが、Yは經營支出も亦大であり、純所得は結局Xの方が大となる（農家10と10の場合には例外である。農家10は薪炭林を利しての炭焼の收入が所得の殆んどを占めてゐる）。別言すればXの方が所得率が高いのである。

(4) 農業收入はYの場合の方がXの場合よりも大である。Yの方がより專業的であると云える。

(5) 財産的收入はYの方が大であり、Xの方が全體の收支で赤字を出しているのと相對している。

(6) 農業外收入についても(3)と同様にXの場合は單位當りのそれに要する費用がYの場合よりも小である。

要するにYの場合、純生産乃至純所得を擧げるに要する費用はXよりも大である。これは一面に於いて經營の維持費或いは配賦費用に類するものがYに於いて大なるによる。面積および大家畜等がYに於いて甚だしく大なることよりこれは容易に豫想し得るところである。他面から見ればこれはXに於いてはより、裸の勞働であることを示している。これは北海道の農業が劣惡な自然條件の下で、武裝して營まれてゐることから考へて當然であらう。家畜が多ければ蹄鐵の費用とて馬鹿にならず、廣い面積を耕す場合

では農具費は増大する。これ等の事實が累積されて、一定の經濟・經營の規模が府縣に比してより、深く貨幣經濟の中に入り込む。一定の經營・生活の程度を維持するには、府縣より多くの金融的操作を必要とする。逆に金詰りも北海道の場合では府縣に比してより、大なる經濟・經營の破壊的要素をもつてゐる。それは府縣では單なる純所得の減少乃至生活程度の低下を意味している場合でも、北海道では經濟を破壊する危險を有している。このことは、北海道の農家經濟に關する數字を扱う場合に注意すべきことであると思う。また見掛けよりもつと生活の内容は貧しいものであることも注意すべきである。

これ以上の分析を行うことは調査の戸數も少いし、XとYの調査時期及び結果表の形式も異つてゐるので無理であらう。又短時間の突然の聴取りでは、聴取りに際しての誤差も生じ兼ねない。依つて以上を指摘するに止める。

四

農家の生活について少し具體的に述べよう。先ず教育及び文化であるが、この一〇戸の中には新制高校に行つてゐる者は一人もない。町會議員であり、酪農組合を作つてその組合長に納まろうとしてゐるほどの農家一の長女は一七才であるが農事及び家事に従事してゐる。但し該當する全ての農家は子弟を新制中學に通わせてゐる。

新聞は殆んどの農家がとつてゐるがラヂオのない農家は多い。これは交通不便な地で電燈のないためである。市街から一里位の

ところでさへ電燈のない農家もある。教育文化費は農家Ⅰが年一萬圓、Ⅱになると二千萬足らずである。他は五千萬圓が一月、三千万圓前後三戸、千圓前後四戸である。如何なる種類の文化財を購入すれば千圓で済むか理解に苦しむ。千圓は我々の購入する書籍二、三冊代である。

次に副食費・煙草・酒であるが、副食費は農家Ⅰが一月四〇〇圓、Ⅱ・ⅢおよびⅣは二〇〇圓、Ⅴが二二〇圓、他は一〇〇圓以下である。若干の魚類(月一八四〇—五〇圓)、茶以外では殆んどが配給物であるらしい。札幌では一〇〇圓は鮭の切身三切、北海道では特に安いと云われている鳥賊でも九〇〇匁にしか相當しない。果實が農家の口に入ると云うことは先ずない。煙草は配給を受けている農家八戸のうち一月五〇〇圓の自由購入が二戸、二〇〇圓が二戸、一〇〇圓が二戸である。これは女が喫煙しなれば配給で足りる場合もあるが、一般には極度に不足しているように感ぜられる。たとえば農家Ⅱの主人は煙草好きであるが、息子が復員して見ると息子も煙草好きになつてゐた。それで息子に喫わせるために自分は牧草の葉を乾したので我慢している。だから息子は一月五〇〇圓喫ついても親父は一錢もかけずに牧草の葉を喫つてゐるのである。一般に若い者でも巻煙草は會合の席上等以外には喫わないと云う。酒は多い家で年一斗、報價の配給酒以外は焼酎が愛用されている。これのみが農家の唯一のものとして残された楽しみであつて、彼等は妻君にすまないと思ひながら楽しんでゐる。

被服費の大きいことは農作業の烈しさに由來することが多いだろうし、年度初めのストックもその大きさに影響する筈だから、それが生活程度のバロメーターになるとは云い難い。年一人當りの被服費は

農家	被服費	農家	被服費
1	七、五〇〇圓	6	二、五〇〇圓
2	四、八〇〇圓	7	四、〇〇〇圓
3	三、四〇〇圓	8	二、三〇〇圓
4	二、五〇〇圓	9	一、〇〇〇圓
5	四、三〇〇圓	10	三、五〇〇圓

である。北海道指導農業協同組合連合會が行つた昭和三年四月一日から四年三月三十一日間の調査では十勝四千圓、北見五千圓である。衣類は北海道では特に高いし、また多く必要とする。報價以外に作業衣一着買ひ得る農家は恐らく農家Ⅰのみであらう。ゴム長靴、地下足袋は闇買ひが出来ぬらしく、配給への希望は痛烈である。(なお農家Ⅱではこの春結婚があつた。)

この町では醫療費が大であると言ふことは衛生思想が普及していることを示すものではない。それは榮養の不足と労働の過重とを示しているように思われる。妻が病氣の家が三戸あり、それぞれ一萬圓を費している。他は弟及び息子の病氣で九千圓(これは通勤者で共済保険による)、四萬圓(これは死亡した)を費している。これは労働の供給面と現金の支出面と農家の經濟に深刻な影響を與えている。世帯主に大きな病氣はない。

農家の消費生活のヴィヴィッドな描寫は文才なき私にはよくなし得ない。しかし上述の數字は一つ一つが一驚に價する程のものであり、眼に映ずる姿はミゼラブルそのものである。狭い、探光の悪い、雪が部屋の中まで吹き込む處で一家が薪ストーブの周圍で一多を過している。着物は破れている。戸は修繕を必要としている。彼等は茶飲話の茶にすら不自由している。寒國では富の差は暖國の者の想像し得ないほど生活の内容に大なる差を生ぜしめるものだ。

方向を變えて、金詰りと再生産の問題を具體例によつて述べてみよう。

一般には農村の金詰りは闇賣りの不振がその原因であると云われている。主食配給の圓滑化、蔬菜・果實等の生産の増加、その結果としての價格の相對的下降、農家所得の減少、このような原因により農家の金詰りが生じて來たと云われている。調査農家に現われた限りでは、農家所得は耕種に依存することが極めて少ない。牛乳代が主たる項目となつてゐる。バターその他の乳製品は、その商品としての性格から比較的完全に統制が續けられて來ており、從來農家の牛乳の自由販賣は絶無であつたから、農家の牛乳代による収入の相對的下降は未だ現われていない。雜穀・馬鈴薯・麥等の闇賣りは從來殆んど行つていなかったからこの面の影響も少い。果樹はないし、蔬菜はネグリジブルである。次に水田部落の米の闇賣りであるが米は一俵五千圓を維持している。札幌の市街で米一升一四〇—一五〇圓であるから生産者價格一二五

圓は相當高價であると云える。これは千歲町の闇米が極めて完全な市場に賣られているためであつて、米に不足している畑作農家は全て附近の水田農家に闇買ひに出るし、千歲町の住民もまた附近の水田農家に闇買ひに出ているためである。これが若し生産者—闇商人—消費者なる市場に面していたのであつたならもつと低い價格となつたろう。この町の水田農家は今でも窮迫せる需要者にとり巻かれてゐる。

過剰となつた生産物は糞と労働である。糞は府縣農家の金詰りによる糞購入難の影響を敏感に受けている。農家1、4及び5ではこのために大いに目算を狂わした。農家1は馬を含めて二〇萬圓近くの目算違ひであつたらしく、結局拓銀からの一〇萬圓の借入れに依存するということになつた。農家4は米の闇賣りに依存している。農家5は牛を一頭三萬圓で手放したが家族員の病氣と死亡による四萬圓の赤字は克服出來ず、一萬圓の借入れとなつてゐる。但し賣却したのは成牛であつて、残つた當歳は搾乳し得ないために乳代の収入減を來している。ヨリ一般的金詰りの原因は出稼勞賃の相對的低下である。阿字佐里部落では一年の間に一日五〇〇圓の収入が三〇〇圓に減つた。根志越でも半分になつたと云ふことであるし、中央何れも街の東北では二五〇圓になつてしまつた。日雇仕事の見つからぬ日も多いと云ふ。これは一般的な勞働過剰のほかに炭焼、薪切りの労働に對する需要の低下が大きく影響している。木炭及び薪が過剰生産になり、それが農家の出稼賃銀の低下をきたしているのである。その反面、出稼勞賃

の低下は大きな雇傭労働に依存している農家の経営を楽にして、農家Iではこの面で経済は楽になったと云う。だが何れの農家も金詰りは家族員の病氣等による経営の不振に原因している。

この意味で牛乳も賣れず、米も作つていないし、妻が病氣と云う農家10が最も深刻である。一昨年にはついに馬を賣り飛ばし今年に配給の肥料もとられなかつたそうである。唯一の収入源たる木炭も初めの五〇俵（十貫俵）は四〇〇圓だが、一〇〇俵は二八〇圓で手放さざるを得なかつた。金詰りの時期は、従つて牛乳代、耕種農産物の賣上代金及び出稼勞賃の三つによつて生ずる。牛の分娩前後三ヶ月、六―八月、農繁期（農繁期には出稼が出来ないから）の三回訪れるわけである。但し経営組織の相異によつてその訪れ方は異なる。即ち牛が複数なら分娩による牛乳代の枯渇は緩和されるし、供出の少い農家は六―八月の金詰りもそれ程目立たない。これ等は更に出費と關連していることも注意されねばならぬ。就中主食の還元配給の影響は大きい。肥料・農具等生産手段の購入による金詰りの弊は餘り聞かれなかつた。これ等に對しては何等かの融資がなされているのであろう。以上のことからこの町の金詰りが出稼勞賃の低下によつて生じているのであつて、牛乳代により、多く依存している上層農家の経済は、出稼勞賃により多く依存している下層農家よりも金詰りが緩やかであると云うことが出来る。

金詰りも低い利子で金策がつけば再生産は繼續し得る。例えば農家Iは拓銀から十萬圓借入れられたので経営も消費経済も支障

なく運行していた。彼が貸入れた名目は「畜産試験のため」と云う意外なものであつた。恐らく一般の農家がこんなことを云つても信用する金融業者はないだろう。彼なるが故に出来たのである。したがつて彼なればこそ牛を窮迫販賣しなくて済み、牛の供給價格を實現し得たのである。農家10には全く逆の立場に立つている。若し配給の肥料代を借りる事が出来たら、また馬を賣らずに済んだら彼は自分の経営をうまくやつてのけることが出来たろう。利子が高くない限り彼は自分の勤勉と節約によつて経営の秩序を長く保持し得たであらう。農家Iは金策がつくが故に *revival demand* を振り廻すことが出来たし、農家10は金の貸し手がないため最も必要な生産手段すら失つてしまつた。この町では一般に金策のつかぬような、最も窮迫した農民には農業手形さえ利用させられないのである。この事實は農業再生産の維持擴大上大いに注目すべきことと思う。それ等の中間の段階は農家5の場合である。彼は成牛を手放すことにより所得の減少を來たすのであるが誰も金を貸して呉れないから己むを得ない。しかし用畜であつたから役畜の場合に比して餘程経営を破壊する力は弱い。その上幸な事に彼は牛二頭を有していたので残りの一頭が仔を産み、數年後には又搾乳出来るようになるのである。即ち數年間低所得に甘んずれば自然の力が恢復して呉れるのである。農業は自然の恵である。金詰りと云う事實が、或る農家では信用あるが故に金策によつて克服せられ、他の農家は信用なきが故に無策のまま――自然の恵によつて切り抜け、第三の農家は何もなきが

故に自己の經營内の調和さえ破つて縮少再生産に追い込まれた。生産を擴大しようと欲しても金融面から出来ない事例もある。農家8は從來餘り小面積の經營であるので經營面積を擴張したい希望をもっている。又農家3は復員とそれに嫁を娶つたためこれも面積が不足してきて開田したい希望をもっている。しかしながらこの二戸はともに出稼勞賃にその經濟を多く依存しているのので、農閑期に開墾や開田に従事するために出稼を放擲するということが出来ない。土地はあるが耕地を増やせない。この二戸の農家に關しては融資のことが擴張再生産を阻止している。

以上甚だ不正確であるが現金窮乏の現われを消費生活面と、經營の再生産面から述べた。數字をみただけでは府縣の場合と同じように思われる北海道の農家經濟が、現實に有している種々の問題の一端をそこにかがいうであらう。

附記 調査にあたつては北海道信用組合連合會の援助を受けた。記して謝意を表する次第である。

(北海道支所研究員)

附表 1 結果表 (23年9月—24年8月)

農 家 番 號	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	平 均
家 族 数 (人)	4	5	5	8	7	6	5	6	10	4	6
同 上 生 産 單 位	2.6	3.6	4.6	3.8	3.6	3.6	2.6	2.6	2.0	1.0	3.0
同 上 消 費 單 位	3.6	4.6	4.8	6.7	6.0	4.8	4.5	3.8	6.7	3.1	4.86
經 營 面 積 (反)	-	1.5	1.05	1.75	-	1.8	1.7	-	1.2	-	0.9
其 中 畑 地	10.0	4.1	0.20	2.3	2.8	0.55	1.3	1.0	2.2	2.6	2.71
其 他	14.0	-	0.30	10.0	7.0	0.15	-	-	-	16.3	4.48
大 家 畜 (頭)	10(5)	2	-	3(1)	2(1)	-	-	1	-	-	1.8(0.7)
種 收 入	30,000	78,072	40,650	76,546	81,604	59,533	65,068	-	5,714	11,043	36,760
排 出 收 入	250,000	125,000	-	47,560	15,000	-	-	73,245	-	-	57,741
勤 勞 業 收 入	200	8,000	91,480	-	40,000	30,000	12,000	55,800	4,000	49,000	30,084
財 産 的 收 入	124,000	45,603	10,000	15,000	26,000	6,000	2,430	3,000	59,044	-	23,603
計	404,200	256,675	142,490	139,106	123,578	105,533	97,498	88,245	65,514	59,044	148,188
農 業 經 營 支 出	190,502	60,957	32,209	39,020	25,317	43,355	30,140	19,400	14,710	9,600	46,521
農 外 支 出	-	-	-	-	2,550	-	-	1,100	5,000	1,000	965
公 租 公 課 利 子	133,280	142,560	82,920	47,200	84,080	38,020	48,028	60,010	41,497	45,260	72,288
小 作 料	47,080	19,395	7,000	9,300	6,000	27,000	12,050	3,998	4,800	3,500	14,012
支 出 (圓)	36,000	25,750	16,000	41,280	4,100	-	5,000	3,600	2,081	-	13,381
小 財 産 的 支 出	406,862	248,682	138,129	136,800	122,047	108,375	95,218	88,108	68,088	59,360	147,168
生 産 單 位 當 所 得 的 收 入	(A) 107,769	58,631	28,802	32,659	27,105	27,648	36,565	32,786	30,757	59,044	41,528
生 産 單 位 當 家 計 支 出	37,022	30,996	17,275	7,045	14,013	7,921	10,673	15,792	6,194	14,600	14,874
生 産 單 位 當 經 營 支 出	(B) 73,270	16,932	7,002	10,268	7,741	12,043	11,592	7,885	9,855	10,600	15,829
(A) — (B)	34,699	41,699	21,800	22,391	19,364	15,605	24,972	24,902	21,902	48,444	25,700

註 農家2及び5の開張り結果は筆者において多少修正した。(本文206頁)

附 表 2 本州水田二毛作地帯の農家經濟

北海道農家の金詰り

農 家 番 號	a'	1'	10'
家 族 數 (人)	5.63	6.0	3.25
{ 同 上 生 産 單 位	3.04	5.6	2.0
{ 同 上 消 費 單 位	4.69	5.8	2.75
經 營 面 積 (反)			
{ 田	0.664	2.04	0.2
{ 畑	0.022	-	-
{ そ の 他	-	-	-
大 家 畜 (頭)			
{ 用	0.03	-	-
{ 役	0.48	1.0	-
收 入 (圓)			
{ 農 業 收 入	70,540	270,990	10,212
{ 農 外 收 入	20,367	-	3,000
{ 事 業 外 收 入	53,270	51,500	41,015
{ 財 産 的 收 入	12,975	84,894	9,875
{ 計	157,152	407,384	64,101
支 出 (圓)			
{ 農 業 支 出	15,041	77,261	5,113
{ 農 外 支 出	5,763	-	-
{ 事 業 外 支 出	206	-	-
{ 租 稅 公 課	27,421	75,507	2,966
{ 家 計 費	89,339	216,682	55,535
{ 財 産 的 支 出	82,551	72,784	1,851
{ 計	160,321	442,234	65,464
生産單位當所得的收入 (A)	47,428	72,747	27,113
消費單位當家計支出	19,049	37,359	20,195
生産單位當經營支出 (B)	5,911	13,797	2,556
(A) — (B)	41,515	58,951	17,638

a' は滋賀縣栗太郡栗山村小野の平均。

1' は岡山縣上道郡操陽村の最上層の農家。

10' は 〆 〆 最下層の農家。

昭 24.9 農林中央金庫調査より作成。

附表 5 主要生産高

	昭和 10 年	昭和 22 年
農 産	581,496 ^円	30,248,534 ^円
林 産	150,950	15,500,000
畜 産	105,112	2,227,700
水 産	25,845	1,193,920
鑛 産	(11年) 2,680,258	-
工 産	7,560	1,422,000

附表 6 主要農産物

	反 別	収 穫 高
米	612.4 ^町	5,389 ^石
大 麥	20.7	190
小 麥	293.7	18
稈 麥	4.5	2,425
燕 麥	373.1	457
大 豆	228.7	128
小 豆	35.6	189
ラ イ 麥	23.7	124
ソ バ	73.4	317
キ ビ	46.2	269
玉 蜀 黍	78.2	351
馬 鈴 薯	157.0	280千貫
南 瓜	117.9	170 斗

畑作付地計 1,451.8 町歩

附表 7 家畜・家禽

	昭和 10 年	昭和 22 年
種 馬	3 ^頭	3 ^頭
種 牡 牛	10	6
牛	776	887
馬	799	438
豚	128	275
綿 羊	50	580
山 羊	-	17
鶏	7,499羽	11,565羽

附表 3 土 地

	反 別
田	1,038 ^町
畑	2,295 ^町
民 宅 地	29
有 山 林	11,166
地 原 野	4,310
牧 場	992
その他	1
計	19,831
國・官有地	27,366

北海道農家の金詰り

附表 4 職業別戸数

	昭和10年	昭和22年
農 業	640 ^戸	838 ^戸
林 業	97	230
商 業	45	168
工 業	65	352
交 通 業	41	130
公務自由業	66	165
水 産 業	-	181
鑛 業	-	9
ガス電気業	-	196
サービス業	-	49
金 融 業	-	52
そ の 他	99	4
計	1,057	582
		2,956

二一四